

第一回写真教室出席者の所感特集



(清水さん) — 電話で原稿を読んで貰った —

6月30日 小雨の中を 小森君のクルマに新美君と同乗。一路神原温泉へ。皆さんよりおくれて会場に着く。と、どうだろう。まさかと思っていた先生の顔が見える。ニコニコと笑って私の方を見ていらしゃる。B先生だ、またやられた！
またというのは昨年のこと古市での例会でした。突然おいでになり会員ぜんぶが見事に出し抜かれたものである。

ともあれ思いがけない嬉しさにホーッとなる。


竹内先生に会えるのが久しぶりでイソイソと、だるいからだを引きずっての出席だったのに、その嬉しさが倍増。かくして三重支部初の写真講座が始った。
竹内先生が指導講師となりB先生は大やじ馬となる。(注。スミエ支部長開会の挨拶の中で即興的にニッフネームしたも) B先生ことのほか、ひとりひとりの作品をていねいに見て下さり一同シーンとなる。

6月30日はとくに過酷な今日は7月1日午前4時30分、窓の外は白んできた。「もう寝ようヨ」と誰が言ったか知らない。床に着いたけど僕はなかなか眠れない。頭の先で寝ている篤ちゃんも眠れないようだ。僕が言った。「篤ちゃん風呂へ行こうか」「よし行こう」と一番ブロへ。
熱い湯汗。そして窓からは山あいの朝の冷気が入ってきて心地よい。

風呂から出たときにB先生が入ってこられた。「オイもう一度入れよ」とおっしゃる。篤ちゃんは逃げ出した、ボクは逃げられない。そしてもう一度湯の中へ。B先生とふたりで裸のおつきあい、こんなよいことマダとない。そして私ひとりにとてもよいこと話して下さい。そのよいことみんなに教えない。B先生はすばらしい先生、私に写真を撮ることもさりながら、人の生き方を教えて下さったように思う。


(沖さん) — 高橋さん 小林さんか写真を持参しなかったのを自分の責任のように感じて 次のような詩らしきものを寄せてくれました —

高橋さん 小林さんが
「写真を持たずに参加した
他人の「写真をかりて
熱心に学んでいた
小林さん 高橋さん
残念でたまらない顔が
私を泣きたい気持ちにさせる
知已先生の
あったかい握手が
小林さんの心にしびれ伝わって
泣きたい思いの私は ほろと涙する




(和ちゃん) — ハガキで着いた第1号感想文でした —

うれしかった！
楽しかった！
ねむたかった！
つかれた！
よかった！よかった！よかった！
停滞ぶきの私をなんとか
エンジンがかかりそうです。
まだ何を取りたいのか自分でも
わからなければ無性に写真
が撮りたくなって7月1日
倉からカメラを持って津公園
へ行きました。
また機会があれば写真教室
をやってほしいですね。支部長
までには作品らしきものが
できるような頑張ります。



(仁さん) — 電話でひとこと —
なかなかよかった。充実していたと思います。
熱心にやっていただいて近來まれにみるすばらしい例会でした。
いろいろ思い当たることあって知已先生が来てくれたのだ
と思います。そのへんをチラチラ感じました。



(篤ちゃん) — 原稿用紙4枚に
90分以内を書いて下さいと注文し
100分後に届いた —



本部の行事などで上京するとき、いつも
思うのだが、新幹線で箱根あたりを過
ぎると、「ああ、武蔵の国だ。山も木も家
も空も……」

東京の人が西を旅するとき、これと同じような、いやそれ以上に
強烈な異国感を抱くらしい。その異国感は、我が国の写真にも
感じられるにちがいない。

僕らが写真伊勢の国 及至は 大和の国の山村写真は、この
地方の風土の持つ強烈なオリジナリティ故に、かえって作家自身の
オリジナリティを背後に押しやってしまうのである。それは普段
この風土に接して暮らすことのない「異国の」人間にはより鮮然と
見えてくるに違いない。

先日の写真教室で、大野次馬 伊藤知已先生が「マンネリズム」
の中で提起してくれた問題のひとつはこのへんにあったと僕は理解
している。

だがそれにしては、僕は「ああ、これが武蔵の国だ」と感嘆する
写真をあまり見たことがない。そのことは逆にいえば、伊勢の国
乃至は 大和の国の風土や歴史の持つ特異性を証明しているに
すぎない。

写真の歴史は このあたりの事情をどうえかくであろうか。
曰く「1970年代後半から 80年代 前半にかけて、「うみのおくやま」
の作者、東洋介を頂点とするJRP三重支部があった。彼らは
好んで伊勢地方や 大和地方の山村を取材し「東調」、「三重支
部調」などの揶揄を与えられ、彼ら自身のテーマの意匠画一性
の中に、個々の作家の主体性が埋没させられていった。一時は
100名もの会員数を誇った支部も東洋介の亡き後、そのテーマの
マンネリズムの中で 作家どうしの共倒れを招き、結局崩壊を
余儀なくされた。」

実は前号の百万石の「原真」という拙文も、このことを書きたか
たのであった。

それは 東洋介先生の真似をして山村を写すのは止めろ、という
のではない。伊勢や大和の山村の持つ独特の風土や歴史を
表現するやというのではない。しかしその作品が作家の意匠の
結晶と云うためには、或は土門先生の言葉を借りるなら、
「1個のペンデュールオブジェ」たりうるためには、そうした風土や
歴史の強烈なオリジナリティを乗り越える程の主体性 或は個性
を 作家が持って なくてはいけないということなのだ。作家自身
が強烈なオリジナリティに裏打ちされねばならないということなのだ。
逆に僕のように山村を止めて、労働者を写すにしても やはり同じ
ことがいえる。

僕は労働組合を取材するに当って「写真リアリズム」バックナンバー
に載っている労働者の写真、看護婦の写真をひもひも見てみた。
そこにはやはり別の「マンネリズム」の道が僕を待ち受けて
いるような予感がした。

我々作家自身が、強烈なオリジナリティに裏打ちされるためには
やはり「原真」を見つめなおすことなしには 不可能であろう。写真
作家としての原点、人間としての原点である。

我々は先に述べたような三重支部
の歴史をつくらねばならない。

